わたしは残る

ある中国残留妻の手記

わたしは残る

ある中国残留婦人の記

久保英子

草書房

久保英子（くぼひでこ）

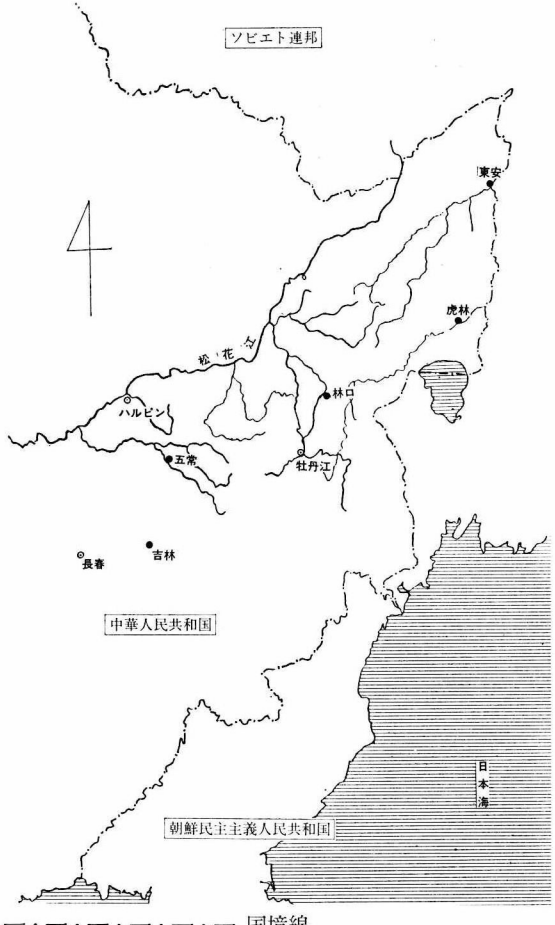
1925年生まれ。
1940年北海道より家族と共に旧満州（現中国東北部）に渡る。1946年殷長貴氏と結婚、三男三女の母。
現在、五常県の第二中学校に日本語教師として勤務。
現住所　中華人民共和国黒竜江省五常二中

わたしは残る
ある中国残留妻の手記
一九八四年三月一〇日第一刷印刷
一九八四年三月二〇日第一刷発行
定価一三〇〇円
著者　久保英子
発行人　久本三多
発行所　葦書房有限会社
福岡市中央区赤坂一丁目一四番二一号
電話　〇九二(七六一)二八九五
振替　福岡一-三九四三〇
印刷製本　凸版印刷株式会社

落丁・乱丁本おとりかえいたします

0095-8408-0135

中国東北部旧満州関係略図



—・—・—・—・— 国境線

目

次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

1 一九四五年・満州 3
2 戦火を逃れて 10
3 姉の決意 39
4 鉄道突破 61
5 山中の行軍 85
6 無条件降伏 116

7 九州開拓団にて 138
8 絶望の日々 156
9 私は生きていく 168
10 一九七四年・日本 183
11 中国の土に 197
あとがき 201

わたしは残る

——ある中国残留妻の手記——

1　一九四五年・満州

一九四五年八月九日、あの日の朝は青空の高いとてもいいお天気だった。

この朝、長崎市に二発目の原爆が落とされ、やがて敗戦へとなだれ込んでいくことなどずっと後になって知ったことでもちろん当時は知るよしもない。

二十歳の私は気ままな暮らしで、この朝も義姉(あね)に起こされるまで寝坊を楽しんでいた。義姉に起こされるまで、こうして寝床の中でまどろんでいるのが習慣になり、この朝も目を開けたり、閉じたり、天井とにらめっこをしていた。

「英ちゃん、ご飯よ」

義姉が声をかけても、私は、

「うん」

と生返事をしてすぐには起き出そうとはしなかった。

突然「キーン」と鋭い、飛行機のものらしい爆音が聞こえた。聞き慣れた日本軍の飛行機の爆音とはどこか明らかに違っていた。

「義姉(ねえ)さん、義姉さん、飛行機よ」

と私が声をかけると、義姉は、

「飛行機が何が珍しいのよ」

と笑った。言外に「早く起きなさいよ」と促されているような気がして、私は布団を乱暴にはね飛ばすと、まるでバネ仕掛けのようにはね起きた。

義姉は「困った妹(ね)」と言うように笑いながら、

「二十(はたち)にもなって、もうちょっと静かに行動できないものかね」

と私をにらみつけた。私は、

「フフフ……」

と首をすくめたが、さっきの爆音がどうも気になって仕方がない。

「ねえ、あの音なんだか変よ。ソ連の飛行機じゃないかしら」

と言うと、義姉は、

「ソ連の飛行機だなんて驚かさないでよ。冗談もいい加減にして、ほら早く」

と私を叱った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

勢いよく台所へ走り込んで、顔を洗うと、義兄の部屋に外から、
「義兄さん、ご飯よ」
と声を掛けた。それを聞きつけた義姉は、
「何を言ってんのよ。義兄さんや子供たちはもうとっくに起きてるわよ。あなたとは違うわよ」
とまたやられた。照れ隠しに私はわざと廊下をバタバタと音を立てて走り、茶の間のお膳に向かった。食べ終わらぬうちだった。表で何か大きく叫ぶ声が聞こえる。耳をすますと、
「皆さん、ソ連と戦争が始まりました。早く準備して駅へ集って下さい」
と男の人の声が叫んでいる。
義兄と義姉は、ほとんど同時に茶碗を置くと立ち上がった。
「早く準備しよう」
声が上ずっていた。
この日を境にして、私達一家の平和でにぎやかな暮らしは再び戻って来なかった。思い出したくもないつらくて苦しい運命が私達を待ち受けていた。

私が旧満州（現中国東北部）に渡ったのは十五歳の時だった。
生まれたのは北海道だったが、三歳のころ一家そろって樺太に渡った。両親に男三人、女六人

の子沢山で大家族だったが、私が小学校にあがるころには、上の姉三人はすでに嫁いでいた。父は胃を病み、病弱だったせいもあって母が苦労を一身に背負っていた。気丈な人で家の内外のことをほとんど一人できりもりしていたが、母は行き届いた人で、子供たちにはみな人並みな教育を受けさせ、着るものでもいつも恥ずかしくない身なりをさせてくれた。

次兄は中学を卒業するとすぐ肺結核でこの世を去った。両親の嘆きは深く、父は悲観したところへ、結核が伝染して入院、まるで次兄の後を追うように間もなく亡くなった。相次ぐ不幸にさすがに気丈な母も落胆は隠せない様子だった。

長兄はすでに満州へ渡り独立して事業をやっていたので、私達一家はこの兄のもとへ身を寄せるために満州に渡ることになったのである。

母に兄夫婦、二人の姉、それに私と十三歳の弟の七人の大家族になった。長兄は牡丹江の北の東安で二十五、六人もの人を使って自動車や機械の修理工場を経営する傍ら三台のトラックで運送業もやっていた。

私達はひとまず牡丹江に落ち着いた。二番目の姉も私達一家より一足早く牡丹江に来ていたし、やがて四番目の姉も次の姉もこの地で嫁いでいった。

五年ばかりは何不自由のない平穏な暮らしが続き、私は牡丹江で学校を終え、百貨店に勤め出していた。次第に新しい土地にも馴れ始めていたが、戦局は日本にとって厳しくなる一方で、つ

いに長兄も召集を受け、牡丹江の南の部隊に出征していった。母は鶏西の姉のもとに身を寄せることになり、長兄の出征で私は百貨店勤めをやめて東安の兄の家へ行った。末の弟は撫順の技術学校に入り、結局家族はあっという間に散り散りになってしまった。

思えば、あれから二十九年、一時帰国で老いた母や姉たちに再会するまで私は家族の誰にも会えなかったのである。

長兄が出征したあとの東安の家には、九ヵ月の身重の義姉と女の子、それに産後の肥立ちが悪くて亡くなった上の姉の主人と子供たち四人が身を寄せ、兄の工場で働いていた。

しかし、頼りの兄がいなくては、ソ連の参戦と聞いても私達はどうしていいのか分からない。とにかくみんなと一緒に着のみ着のまま駅へあわてて駆けつけることにした。

「この家どうする?」

と義姉が私に相談をもちかけるように言うが、私もどうしていいか分からない。こんな大きな工場と家を見捨てて逃げるのは残念でならないが、かといっていい方策も思い浮かぶはずもない。

義兄は四人の子供を連れて思いあぐねた様子で玄関先に突っ立っている。

「義兄(にい)さん、とにかく子供たちを連れて先に駅へ行ってて下さい。私は後からすぐ追いつきます

から」
と言って私は義兄一家を急き立てた。
「英ちゃん、あなたどうするの」
と義姉がいぶかしそうに尋ねる。
「この家、ガソリン倉庫に火をつけて爆発させようと思うけど」
と私が言うと、義姉は目を丸くして、
「まあ、恐しい、そんなことあなたに出来るの？」
と言う。私はガソリンを地面に流して、間に合わせの導火線をつくり、遠くから点火させれば何とか爆発させられるはずだと義姉に説くが、義姉は半信半疑の様子である。
あれこれ考えている暇はない。私は倉庫からガソリン一罐を持ち出すと、細長く地面に流しながら二十メートル余りも走っただろうか。心配そうに見つめている義姉に、
「大丈夫よ、早く行きなさい。火をつけるわよ」
と急きたて、胸をポンとたたいてみせた。
「そう？　大丈夫かな」
と義姉は心配そうにしながら、それでも振り返り振り返り離れて行った。もう大丈夫だろうと思われるぐらい義姉が離れてから、私はポケットからマッチを取り出した。すると、だれかが私

を怒鳴った。
「おい、待て。何をするんだ！」
声の方を見ると若い憲兵が私の方をにらみつけている。
「家を爆発させるのよ」
と私も強い調子で答えると、憲兵は、
「爆発？　あんたが？」
と笑い出した。私は大口をあけて笑う憲兵が気に入らなかったので、
「何よ、そんなに笑って」
と言い返してやった。
すると、この憲兵は私に「この家の者か？」と尋ね、「そうだ」と答えると、
「実は、私は命令でこの家を爆破に来たんだ。こんな大きな工場を敵の手に渡すわけにはいかんのです。これは命令です」
と告げた。ガソリンより火薬が確かだろう。それなら私が出る幕ではない。
「じゃ、私行きます」
と義姉の後を追った。

2 戦火を逃れて

駅はごった返していた。誰がどこにいるやら、義兄たちはどのあたりにいるやら分からない。みんな不安そうな様子だ。

そのうち義兄の三番目の男の子が「叔母ちゃん」と声を掛け、向こうの方から見つけてくれた。やっと合流できたが、さて何時になれば汽車が来るのか誰に聞いても皆目見当もつかない。強い日差しの下でジリジリと太陽にあぶられながら待っているが、一向に列車は現われる様子はない。

お昼ごろだったろうか。突然鋭いサイレンが鳴ったかと思うと、爆音が聞こえてきた。見上げると、敵機が三機、真っすぐ駅目がけて飛んでくる。

「敵機だ、逃げろ」

「爆弾だ」

と人の波が急に崩れ、四方八方へ、それぞれ逃げ惑う。敵機の胴体から何か黒い物が二つ三つ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.